板書例

1　第一段〈行為・展開〉

アイロンがけの最中にシャツの青が消えた
　…視力がどうかしてしまったのか
明るい部屋に移動してよく見てみた
　…変化なし・「とりとめのない白」
寝室のクローゼットの中を見てみる
　…青いものはすべて「歳月に洗われた見知らぬ人の骨のような白」に変わっていた。
（ガールフレンドと行った）ハワイ旅行のアルバムを出して見た
　…青い海は「シベリアの氷原のような茫漠とした白い広野だった」

青が消えたあとの白は空虚で、よそよそしい印象

その時の「僕」の状況を整理すると
〈時間〉一九九九年一二月三一日（大晦日）の夜
〈場所〉僕の自宅
〈状況〉
・僕は少し前にガールフレンド（恋人?）とけんか別れをして、ものすごく落ち込んでいた。
・新ミレニアムを祝うパーティーで浮かれ騒ぐ世界中の人間
◎僕の印象↓「くだらない」…そこで、ひとりで家に閉じこもってアイロンをかけていた。そして青が消えた。

2　第四段〈行為・展開〉

・電話で総理大臣（中央コンピューター・システムによる合成・バーチャルな総理大臣）を呼び出してたずねた。
・総理大臣「青はまことに美しい色であります」
　↓牧水の短歌が好き・美しい短歌と答える。
＊若山牧水の短歌「白鳥は哀しからずや」↓白鳥は哀しいのか?
　「空の青、海のあをにも染まずただよふ」
　↓白いのは自分だけ・孤独?それとも孤高?
・僕「青がなくなってしまったんですよ」と怒鳴った
・総理大臣「かたちあるものは必ずなくなる」と言い聞かせるように僕に言った
　「好き嫌いに関係なく歴史は進む」
　「何かがひとつなくなったら、また新しいものをひとつ作ればいい」
　「その方が経済的」
・僕はわけがわからないままどこまでも歩き続ける
　↓納得できないが反論もできない
・みんなが歓声をあげる・新年になり新しいミレニアムがやってきた・誰も消えた青のことなんか気にしていない
でも青がないんだ、と僕は小さな声で言った。
そしてそれは僕が好きな色だったのだ↓ゴチック体で強調・断定
＊僕と周囲の人々との対照性はいっそう明確になりつつ終了する。
＊僕が強く訴えたいことは何だったのか。